

「急進的文學論」の位置づけ」 讀書メモ

平成二十二年五月二十三日

〈はじめに〉

初出は昭和二十三年一月「花」である。「急進的文學論批判」といふのが、その際の表題である。中野重治の「解説の解説」——「鵠外位置づけ」のための雑文——昭和二十二年八月「展望」にも中野の全集では、「鵠外位置づけ」のために」と簡潔なる表題にのべてある。

「位置づけ」といふ表現に、恒存は、プロレタリア文學者中野の過去の歴史に対する尊大さを感じたに違ひない。「急進的文學論」といふ表現を用いたのも、その「位置づけ」といふ表現を借りたのも、恒存の「一種のはらだたしさ」のあらわれであらう。中野とそのグループの「急進的文學論」は、即ち「古めかしい文學論」であると、冒頭部分で批判し、論の結びは、「つひに一片の政策論にすぎない」とはるはる厳しく裁断してゐる。

中野の政治主義ゆゑに、フィルムのかわつた「鵠外観」と恒存の「鵠外観」と、どちらが文學の本質、藝術の正見化といふことに、深く鏗を垂らし得てゐるか。日本の歴史・伝統に対する受悟の念を喪失し、粗笨な公式的イデオロギイで、現實を料理し、作品や文學史を裁断してゐる中野に、党派に属さず、自身の言葉で、文學の本質を語る、若き批評家「恒存」の見事な批判が展開された一文だ。

〈各段落の要点〉

段落一

- ・中野重治の「鵠外位置づけ（鵠外観）」
- ・日本の民主革命、文化革命成功のため、日本の文學の最高の敵とみなせ。

・古い支配者の道徳に安心して坐つてゐる

・古いものに屈服 封建的なものの維持に奮闘

・「鴉片位置づけ」かほらむ三つのモメント

① 文學の本質

文學とは何にか

中野は自身の文學概念を開陳すべきに

政治と文學との混同を指摘して

「近代文學」

過去のプロレタリア文學をめぐり

教回 論争

「近代文學」同人

平野謙

荒正人

「新日本文學」同人

中野・徳永直

宮本百合子

② 精神のたかみとはいかにあるものか

文學は人間性のためのたかみ

そのための日取高の、もっとも切實な

本質的、唯一の存在形式

③ 文學の効果

小説の読み方・讀ませ方

批評・作家論・文學史のたり方

← この三つの問題を解説してゆけば

急進的文學論の位置づけがよこるはれる

段落二

文學の本質の究明

・作家の性格と生活の観点から、一流の詩人・小説家を
つかめてみると

ほとんどが、古いものに対する屈服のしかたを
見せてくれるのではいか

・ 鵝外は、古いものの屈服することによってしか、
文學的完成とはかれなかったか。その理由は、

當時の歴史的・政治的・社會的現實の
必然的なり方のゆゑとしなければならぬ。

すなわち個人的倫理感の解説と、
社會的現實の内に得ようとする方式を採ることは、

一流作家も、古いものの屈服してゐるのに
それ鵝外の屈服を、これほど問題視するのみか。
彼らの史觀が、単純に屈服などといふ
のんきなことば、言うぬれぬは、皮肉を言ふ。

・ 恒存の文學論・藝術論

藝術的完成は表現することにより、その現實性と
自己共に納得しうるやうな現實と
とどめること。

人間生活は、無意味な事實の連続に分解され、
各自が懐いてゐる大義・大目的も、無慘に消滅

← これには耐へられぬ

精神より云ふか、とは、自分の生活における主題の発見と
維持とといふ。

この主題の形式に、いさか、役立ちうる事實を、自己の
生活において強調するやうにさせる。

主題のもとに、ささいな事實をも組み入れようと試みる。

・ 文學者とは、専門の家として、たゞ、現實の素材に、
意味的聯關を胸へるやうに強調する意識をもつて、
その生活を、主題的に統一して仕舞ふか、とする人間。

段落三

・鷗外の「屈服」の意味するもの

明治日本の混乱の様相を科学的に分析することか
歴史學、社會科學の任務である。

それらが不十分のため文學の領域で公式的イデオロギーか
現實を料理し、作品や文學史を裁断してゐる。

鷗外は、新しい近代的なヒューマニティを自覺し、それをほぐみ
完成する手段・方法として、古きものへの「屈服」を志した。
「屈服」は、激しい闘争の逆説なりだ。

文學と政治の課題は別だ

作家は現實を徐々整理するのではなく、ひとつの作品のうちで
一學に敢行してのけるければならぬ

今日の自分に與へられてゐる現實を、破壊するのではなく
現在のままで、完成體のうちに位置づけることである。

鷗外の史傳に至つて、彼の人間性のためのたふさは正比例して
激烈化し、彼のヒューマニティは厳しい光を放つてゐた。

段落四

・文學の效果について

荷の重さに耐へ、遊ぶ半分にゐるもそれをかついてみたくなる

體力を養ふことのうちにある。鷗外を讀むことにより

近代的な自我のめざめと、そのための精神のたふかみかたを
學ぶ。それが、正しい小説讀法だ。

これか、社會革命の意圖とどこで矛盾するか

鷗外の「屈服」に敬意を表すること、現代における
社會革命への責務とか、同時に成立するやうな
讀書法を教へることが、あるべきだ。

急進的文學論は、一片の政策論にすぎない

中野よ、プラトンの教習、トルストイの勇気、二葉亭丁の
故事に學び給へ。

〈まとめ〉

恒存の自ら第一期と呼ぶ戦後から昭和二十四年までの間、いはゆるポレミッという小評論が、多く執筆された。当時、政治と文學も熱心に論議されたテーマのひとつであった。近代文學「同人」と「新日本文學」同人との間で、論争が交わされてきたが、平野が中野の文章に対して批判した際、恒存の表現を引用した部分があり、中野が反論に際して、恒存にも、厭味たふりの、見當違ひの言及があった。

平野は、政治と文學の混同を指摘し、中野は、「一元的統一を求める立場に立つてみた、恒存は、平野について、もろろんぼくの極端な峻別とは立場を異にする」と述べてゐる。この様な背景があつて、この急進的の一文が書かれたのだが、後日、昭和四十年代の、恒存の評論集「後書」において、時流の中にあり、本気で論戦しつつも、常に本質論を忘れるかつたと述べてゐる通り、年齢も上でおそろく知名度も上下、その弱点をうたきつつ、恒存の文學論と、文學と藝術の本質論を、清冽な筆致で表現し得てゐるのは、さすがだと思ふ。

恒存のふいふ極端な峻別であるが、現代人の救ひといふこと、一匹と九十九匹との作品において、そのことを、切實な表現されてゐると感ずるが、この切實さの底には、文學は、さういふ人間性のためのたかひであるのみならず、おそろくはそのための最高の、もっとも切實な、もっとも本質的な、そして唯一の存在形式であるといへよう（急進的：p.294）といふ恒存の文學観がある。第一期の恒存の仕事は、この自ら掲げた文學観との、孤獨な格闘の足跡といへるのには、その歩みか、やがて、藝術とは何か」といふ長編に大きな成果をもたらすし、チャタレイ裁判、欧米への外遊といふ、世俗に鍛へられた後には、人間、この劇的なものといふ、人間未踏の文學が誕生したためであらう。